梨の花

梨の花

中野重治

梨の花

昭和三十四年五月三十日　発行
昭和三十四年六月二十日　二刷

定価　参百弐拾円
地方売価　参百参拾円

著者　中野重治
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(34)代表〔七一一〕〔〇一一〕〜〔九五〕
振替　東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社またはお買求めの書店でお取替えいたします。

印刷・東光印刷　製本・新宿　加藤製本所

© S. Nakano　Printed in Japan

梨の花

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

1

良平は一升徳利をさげて高瀬屋の店を出た。やはり徳利だ。樽にしてくれとは、いつのまにやらいえぬようになっている。高瀬屋のおんさんが、良平を小学校生徒あつかいするからだ。

「もう学校へ行きなるんか。えらいのオ……」

いつかそういわれた。そういわれた以上、樽にしてくれぬかとはいいにくい。良平は我慢をして、どこまで行ったら手を持ちかえるか頭で見当をつけている。

松岡屋の前をとおる。松岡という村が、どこにあるかは知らぬがどこかにある。おおかた、その松岡の村から出てきて、先祖がだか、呉服屋をはじめたのだろう。それで松岡屋という。あれは屋号というのだ。大人たちの話からして、きっとそうだろうと良平は思う。竹田屋というのは、やはり竹田の村から出てきたにちがいない。竹田は山つきにある。そういえば、今出てきた高瀬屋は、あれは高瀬から先祖が出てきたのだろう。高瀬の村は行ったことがある。竹田や松岡は行ったことがない。

松岡屋ののれんの下から、中にいるお客の足のところが見える。草鞋に脚絆をはいている。足袋なしで草鞋だ。女の足だ。何でだかはわからぬが、女の足なことにはまちがいない。あれは山つきの村の女だろう。山つきの方の人は、言葉もちがうがはきものもちがう。草履でもちがう。山つきの方の人は足なかのような草履をはいたりする。このおばさんは、松岡屋のおんさんやおばさんに、切れの相談をしているのだろう。おなしことを何べんも訊いて、松岡屋のうちのものから少しあなずられているのだろう。それは松岡屋がわるい。

良平はこんにゃく屋の前をとおる。こんにゃく屋は魚屋だが、何でこんにゃく屋か。むかし、こんにゃく屋だったのだろう。今でも、こんにゃくを売っていることはいる。こんにゃく屋には年よりのおんさんと若いおんさんとがいる。年よりのおんさんは髭を生やしている。若いおんさんは非常に元気がいい。夏の屋根ふき時分に——それとも、五月のそとめさまのくる時分だったか。——車を曳いて村へ鰯売りにくる。

「いわああし、わし、わし、わし……」
お天気のいい日にきまっている。声が村中にひびく。平生は村へは売りにこない。
このこんにゃく屋には年よりおばさんがいる。いつも帳場にいるが今日はいない。このおばさんは「じょろしゅあがり」だと聞いたことがある。「じょろしゅ」というのはわからない。「あがり」というのもわからない。このおばさんはちがう言葉つきをする。良平は、あれは大阪の方の人だろうと思う。遠方から嫁にくる人はある。何で大阪だろう。大阪へ行ったものがああいう言葉つきをするからそうだろうと思うのだな、と思う。
村からは毎年大阪へ行くものがある。若い衆が行く。若い衆が、だれでもではないが、大阪へ「ぬげて」(逃げて)行くのだ。
「山崎の吾一つぁん、大阪へぬげってったと……」
「ほ、やっぱりぬげてったか。おとっつぁん、連れに行かんならんな。また、物いりじゃわい……」
大人のそんな話を、良平は何べんも聞いたことがある。逃げて行き方も大体良平は知っている。
十七八になると、その若い衆が、だれもいない時に町から米屋を呼んでくる。それは、稲刈りも籾すりもすんで、米が「ひょう」(俵)になってからにきまっている。若い衆が米の俵を売る。親にかくして一俵売る。その銭を持って、一里あるいて新庄から汽車にのる。父親があわてて連れに行く。大抵それで帰ってくる。そんなのは言葉つきは変らない。
迎えに行かぬ家もある。行っても連れて帰らぬときもある。そんな若い衆が、二三年して——といっても、良平には何年だかよくわからない。——言葉つきが変って帰ってくる。それが良平の家へも挨拶にくる。そのときは粟おこしというお菓子を持ってくる。平べったい板になったお菓子で、良平はこれが好きだ。包み紙に大黒様の絵がかいてある。「粟おこし」と字で書いてある。「おこし」は仮名だから、これだけは良平にも読める。それでも、言葉つきは変っていてもこんにゃく屋のおばさんのとは少しちがう。似ているのは女の場合だ。
女は逃げては行かない。女は奉公に行く。そして病気になって帰ってくる。
家じゅう出はらった中で、病気になって帰ってきたその家(や)の娘が、番をして一人でいる。そこへ子供が遊びに行く。そこへ若い衆が話をしにくる。女衆は雑巾(ぞうきん)を刺している。

「大阪ら了、おもっしょいじゃろ。」と若い衆がいう。
「なあも、おもしろいことあれへん。」と女がいう。
あるとき、山崎のお種さんという娘が、牛の乳のことを「ぎゅうちち」といったのを不思議に思って聞いたことが良平にある。そんなのがこんにゃく屋の年よりおばさんのに似ている。おばさんは、「ぎゅうちち」とはいわなかったが。

良平は田中屋の前をとおる。田中屋はお菓子屋だ。しかしここは、村から出てきたのではないだろう。田中という村はない。村からきたのかも知れぬが。田中屋の田中は苗字だろうと良平は思う。良平は、おじさんと町へきた次手に田中屋で飴湯を飲むことがある。この飴湯が良平は好きだ。

どんな仕掛けになっているのか良平にはわからない。しかし飴湯はいつでも熱かった。箱がある。箱に金（かね）の釜がはめこんである。その釜から、「かね」（金）の柄杓で田中屋がコップに汲んで出す。コップは、まわりに削りとったような縦のすじがある。それがきらきらする。茶色の飴汁はとろりとしている。生薑の汁がはいっているのがうまい。しかし今はない。あるのは夏のうちだけだ。田中屋が店がきれいなのも良平は好きだ。飴湯の台箱のところにも、いつもちゃんと洗った布巾がかけてあった。田中屋は、飴汁が垂れても垂れなくても一々それで釜の縁を拭いた。ただお客と話しながらでもそこらを拭く。

とうとう良平は「じょっさま」の前へ出た。「じょうおう寺」とか「じょうほう寺」とかいうお寺だ。どっちがほんとの名か良平は知らない。ここまできて良平は手を持ちかえた。

「じょっさま」は嵩ばったような大きなお寺だった。町にはお寺が何軒もある。良平の知っているだけでも六軒ある。まだあるかも知れない。その中でもこの寺は大きかった。この寺には、町の高等科へ行っている「おしんぶっつぁん」（お新発意様）がいる。この「おしんぶっつぁん」は、ひょろひょろ痩せている。顔がほんとうにあおい。痩せて青い顔をした人はいるが、この「おしんぶっつぁん」ほどのはいない。わけても子供ではいない。背が高くて、顔が細くて、鼻が尖って、口許も尖っている。それが、着物の上に衣を着て歩いてくるのに良平は何べんも出会ったことがある。首をまっすぐにしたまま、歩きながら良平をちらりと見る。目玉だけで見てすれちがう。にこりともしなければ、その外にどうともしない。夏でも寒そうな顔をして、手が見えないように衣の袖をくっつけて、足ばやに行ってしま

う。幽霊みたようなこの「おしんぶっつぁん」が、あるとき声を出すのをすれちがいざまに良平は聞いた。伴の人に何かいったのだったが、声が大人のように低いのに良平はぎょっとした。

良平は、「おしんぶっつぁん」が痩せて青いのをおかしなことに思っている。ここの「ごぜん」(御前)は金縁眼鏡をかけた恰腹のいい人だった。「ごしんさん」もよく肥えた美人だった。何で「おしんぶっつぁん」だけがあんなだろう。お寺方は御馳走も食てるはずなのに……

「じょっさま」の横手に「どじょうをとる家」がある。ほんとの商売は良平は知っていない。ただ時々、良平のところで、この家のおんさんに頼んでどじょうを売ってもらうことがある。このおんさんは、良平のことを覚えていて、良平を見かけると言葉をかけてくれる。

「おお、いま帰んなるか……」

「あい……」

今日はいない。ここで町が終る。そこに川がある。その川ぶちの、「じょっさま」の背中になる長い板塀にいくつも看板が貼ってある。人の顔の絵のはいったのがそのうちに三つある。

一つは鳥の毛の帽子を冠った八字髭の人の絵だ。帽子は三角の帽子で、その山型のへりに白い鳥の毛がついている。この人はいかにも色の白そうな顔だ。これは「仁丹」の広告看板だ。

一つは禿頭で鉄ぶち眼鏡をかけたおんさんの絵だ。この人には、鼻の下、口のまわり、顎からおとがいにかけて束のように大きいひげがある。長い顎ひげはまっくろに縮れている。仁丹の人よりもからだも大きそうだ。これは「大学目薬」の広告看板だ。

もう一つのも大きな顎ひげのおんさんだ。これは頭は禿げていない。髪の毛をのばして、長目の角刈りのようにしている。鼻がずっと大きくて高い。ひげも一番大きくて長い。顔をちょっと斜かいにしている。からだは、「大学目薬」のよりもっと大きそうだ。これは「ダンロップタイヤ」の広告看板だ。

三つの看板はあちこちにある。いつでも並んでいるとは限らぬが、この三つは良平はよく覚えてしまった。このなかで、「ダンロップタイヤ」のは西洋人ではないかと思う。ただ良平は、西洋人というものをまだ見たことはない。しかし西洋人だろうと思う。良平は「仁丹」は知っている。「大学目薬」も知っている。「大学目薬」は、細い箱にはいった薬そのものを見たことがある。しかし「ダンロップタ

イヤ」がわからない。自転車の絵がついているから、自転車に関係のあるものかとも思うが、そこははっきりしない。ダン――ロップ――タイヤ。この、ダン―ロップというのが良平は好きだ。ダン―ロップと口でいってみる。気持ちいい。三人のうちで、このおんさんが一番偉いような気がする。

橋の詰からちょっと行ったところに、岸の草のところにしゃがんでいつものおんさんがやっぱり鮒を釣っている。魚を釣るものは仰山いるが、このおんさんのようなのはいない。このおんさんは、何が商売なのか誰にも――子供には――わからない。このおんさんみたよに、年百年中さかなを釣る大人は外にいない。それでも、魚つり商売でないことは子供にもわかっている。

このおんさんは青ぐろい顔をしている。煙管をくわえて、腰に犬の毛皮の四角いのをさげて、それを敷いて岸に腰をおろしている。誰とも物をいわぬ。子供にもにこりともしない。良平たちは、大人でも、魚釣りにはバケツを提げて行く。鯰なんかは、枝に通してさげて帰る。このおんさんだけが特別の容れものを持っている。ブリキの小判型の箱で、上に網が張ってある。箱に水がはいっている。釣れたのをその中へ入れて、上で網をしぼる。

誰でも、釣れると声を出して叫ぶ。

「釣れた……」

「釣ったぞ……」

叫ばぬまでも笑い顔になる。このおんさんだけ一つも声を出さぬ。にこりともしない。黙ってブリキに入れて、黙ってまた糸を投げる。子供たちも、あんまり傍まで行ってみては悪いような気がする。

おんさんはあちこちと釣って歩く。良平の家の横手の川へもくる。秋から冬になると、村のものは誰も魚つりはしない。このおんさんは、霰が降るようになっても釣りに出る。空が寒く曇って、野にだれも出ていない日、その野のどこかに、このおんさんの黒いかげが小さく見える。道も何もないところをそれが動く。川がそこを流れている。おんさんが岸づたいに動く。

このおんさんが何か病気だということを良平は知っている。誰から聞いたのかは知らない。肺病か何かの病気で、療治のために魚を釣る。毎日鮒を釣って、背ごしにして薬がわりに食う。商売でもなく、楽しみでもない。そのことが、よく呑みこめぬまま良平に気味がわるい。

そのへんから良平は田圃のあいだへ出る。すこし行くと西里になる。西里は、ほんとの名は別にあるが良平はよく

知っていない。町の西にあって、家数なら十軒ばかり、良平の村の四半分くらいの出村のような小村だ。町の西にあるので西里というのだろう。高瀬屋へ酒買いに行くたんび、郵便局へ手紙出しに行くたんび、行きかえりに西里を通らねばならぬのが良平に苦手になっている。

西里には良平の同級生がいる。それは二人いる。二人とも女だ。「めえろのこ」(女郎の子)だ。北というのは背が低い。丸い、堂様の甘茶仏のような顔をしている。眉毛が上へまるく二つ並んで、伏目が下へまるく二つ並んでいる。いつでも伏目をして、目がね橋の絵のようになっている。北は非常におとなしい。ぼこい。本多というのは背が高い。北よりも顔も長目だ。濃い眉毛がくっつくように生えている。目をぱっちり見ひらいて人の顔を見る。その目が黒くて大きい。ひげが生えている。何となく生意気に、おてんばに見える。

一年生でも、男の良平は女とは話もしたことはない。話をする必要もない。どっちかというと、良平は本多の方に興味を持っている。それでも、話をしたこともなく、用事があったこともないのだから、まるまる無関係だと良平は感じている。

しかし西里には、二人の同級生のほかに、同じ学校の生徒がまだ四人ほどいる。みな一年生ではない。四年生、五年生、六年生といったへんだろう。女も一人いるが、あとは男ばかりだ。これが苦手になる。

西里は、村は小村だが屋建ちがみないい。きちんと垣根をつくって、それを刈りこんでいる。どの家も大きくて、青壁の門の家もある。刈りこんだ高い生垣にかこわれて、なかに子供が遊んでいるか、外からはわからない。その垣根のかげから、その四五人の上級生がひょいと、ばらばらっと出てくる。出てきたところへ良平の方でぶつかったのかも知れぬが、良平がくるのを見ていて、四五人の方から出てきたのかも知れない。

良平の行く手へ、その四五人が何となく立ちどまる。一人出てきて、それほど真剣でない調子で通せんぼうをする。それ以上にはしない。道の両側へわかれて並んで、良平が、両側から見られながらその間を通って行かねばならぬようにする。これもそれ以上にはしない。

何かいいかけることもある。良平は黙っている。簡単に答えることもある。通せんぼうは、相手がわきに退くまで良平も立っている。これは、一度よけてわきから抜けようとしたことがあった。すると相手もそっちへ動く。それをまたわきから抜けようとすると、相手がまた動いた。良平

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

は腹が立ち、泣きたくなり、徳利をさげたなりで仕方なしにつっ立っていた。

やがて相手が、持っていた笹竹で良平の徳利をさわって、「あははは……」と笑ってわきへ退いた。非常に侮辱された感じで良平は歩きだした。曲り角へきてもふり返って見られない。それからは、相手がどんな顔をしても黙ってつっ立っていることにしている。

何で西里の子供らは良平にかまうのだろうか。良平には全くおぼえがない。そんな上級生と学校で顔をあわせることもめったにない。ただ、ほんのいたずらにからかうのだろう。殴ったり、蹴ったりはしない。それでも、なぐりかからるのよりも良平はいやだ。おまけに、まだ学校前の小ちゃい子供たちが、不思議そうな、それでも面白いことは面白いといった顔つきでいたずら子供たちに加わってくる。よちよち歩きくらいのまでが、両側にわかれて、背中を垣の根っ子の「たつのふげ」(竜のひげ)にこすりつけながら良平をみる。この小ちゃいのは、二三人くらい押したおしてでも行けるが、大きいのがいるからそれはできない。その上、北と本多とがいる。二人が、いたずら連から少しはなれて、二人だけでかたまってこっちを見ている。北はやはり伏目をしている。伏目でも見ているとしか思えない。本多は、顔色をかえずに、目を一ぱいに開いて良平がどうするか見ている。気の毒という顔もしない。いい気味という顔でもない。わざわざ見なくてもそれが良平によくわかる。この同級生が、表情を動かさずにいる冷酷さが良平に苦しい。いつまで続くのだろう。良平が五年生にも六年生にもなるまで続くのだろうか。直接乱暴しないこと、何でかという理由が考えられぬこと、そのために逆に良平がいやになる。

しかし今日は、西里の子供は誰も出てこなかった。西里を出はずれるところに大きな「よのき」(榎)がある。鳥がきている。もう葉が落ちかけている。ここまでくると、畑と田圃との野を越して良平の家の欅がみえる。ここから家まで、あいだにさえぎるものがない。からりとして気もちがいい。西里の子供がきても、ここから先きへは追ってこない。村地籍がかわってしまう。

欅が美しく見える。良平は、榎よりも欅の方が上等の木だと思っている。欅の方が好きだ。家にあるからでなくて、よその家のでも欅の方がいい。

ときどき良平は、欅と榎とどこがちがうのか考えてみることがある。どこがちがうのかわからない。見ればわかる。良平の仲間には見てもわからぬのがいる。

「ほら、これがよのきじゃが。これがけやきじゃ。」
そういって教えてやるが、頭ではわからない。どうちがうか口でいえといわれるとそれは困る。
手を持ちかえ持ちかえして良平は歩いて行く。
「ひゅ、ひゅ、ひゅうん……」という音がする。かすかな面白い音だ。
何が鳴るのか。
何が鳴るのだかわからない。
すぐそれが、北風が耳たぼにあたって鳴るのだということに気がつく。これは面白い。風のあたる右の耳たぼが鳴る。左の耳たぼは鳴らない。鳴るのは笛のように鳴る。
そのとき良平は、奥歯のどこかがきりっと痛むのを感じた。
「きりっ……」
それだけですんだが、良平は不安になった。また疼いてくるんではないか。虫歯がまた出たんではないか。思いだすだけで虫歯はいやになる。ずっと直って忘れていたのだが……
畑の大根がだいぶ伸びている。青くびが二寸くらいも地面から出て、大きい葉が地べたに垂れ気味にふさふさ冠さっている。白い肌のところも持ちあがっている。
「あの青くびをぽきんと折る。爪で皮をぐるぐる剝く。中身が出てくる。まっ白の肌に、半透明の網の目のようなすじがついている。それをがぶっと噛む。あまい……」
そう思ったとき、良平はまた不安になった。大根は噛むとつめたい。歯も顎も力が要る。青くびをかじる——と考えただけで、また歯が痛んでくるような気がする。
じっさいは痛まなかった。しかし不安は去らない。大根は忘れたい。地蔵様はごめんだと思う。
この前、去年もおととしもだったが、良平は虫歯で続けて泣かされた。冬がわるい。雪合戦に夢中になる。垂氷取りであっちこっちほっつきあるく。みんな遊びあきて家へかえることになる。すると虫歯が痛んでくる。痛いとも痛い。ずうんと疼く。痛いのは我慢するが、疼くのが我慢できない。しまいに良平はしくしく泣きだす。
「雪あすびがわるいんじゃ。雪あすびは止め。」とおじさんがいう。
「さ、あたって、あたって。こっぽりあたって早う寝ない。」とおばばがいう。
寝ると忘れてしまう。それでまた雪あすびに出る。また疼いてくる。
「そんな、泣いていんと、地蔵様へ行ってこい。よおう頼

んでくるんじゃ。」

囲炉裡ばたの柱に、一文銭の綱がかかっている。一文銭をおばばは文久銭という。それが五十枚ほど、孔に細縄を通して柱の折れ釘にかけてある。それをおろして、一枚ぬいて、あと縄を結んでまたかけて、その一枚を握って良平は堂様へ行く。堂様の御拝の手前に、石の垣でかこった小さい堂がある。その堂のまわりに、苔の生えたのや頭の欠けたのや、背の低い仏様がぐるりと立っている。たおれかけているのもある。頭巾をかぶって涎かけをかけているのもある。そのなかに虫歯の地蔵様がいる。

虫歯の地蔵様は、青ぐろくぼろぼろになって、目も鼻も顔はよくわからない。それが、首をかたげて、片っ方の頬に片手あてている。虫歯が痛むので、手でその方を押さえているのだ。

堂様には誰もいない。良平は地蔵様のところへ行って、一文銭を地蔵様の足のところへ置いて、しゃがんで手をあわせて拝んだ。

「地蔵様、地蔵様、うらの虫歯を、どうか直いてくんないのれ。地蔵様、地蔵様、うらの虫歯を、どうか直いてくんないのれ。」

そうして帰ると、帰りにはいくらか痛まない。それでも、明日また雪あすびに行けば同しことだ。

そのうち春になった。春になるにつれて、痛みが間遠になって行った。そしてとうとう痛まなくなった。良平は虫歯のことを忘れてしまっていた。それがまたやってきそうにある。しかし良平は、地蔵様へはもう行きたくない。あんなものはあかん、と思っている。大根畑が続いてから蕪の畑になった。

「かぶら……」

蕪のことは考えても歯が痛みそうにない。

「あ、肥しが足らんのじゃな。」

そこにあかい葉の蕪畑が出てきて良平がそう思う。あれは肥しが足らんのじゃろう。あれは食ってもかたいじゃろう。それは良平は知っている。いつか宮平の家へ、おじさんの代りによばれて行ったときのことを良平は思いだした。それは、よくはわからなかったがおかしい話だった。おかしい話のことを思い出していれば、虫歯がまた疼いてこないような気がして良平は自分で思い出した。

一と月ほど前、良平はおじさんの代りに宮平へよばれて行った。何のよばれか知らなかったが、村中あつまって、お寺さまもくるのだということだった。良平は、風呂敷にお膳を包んでもらって提げて行った。ほんとうをいうと、

良平は箱お膳がほしかった。良平のところでやるときも、よその家では箱お膳を持ってくるのがある。あれは、中へ椀もお汁椀もみなはいって、上から蓋ができるので都合がいい。蓋を取って、中から出して、そして蓋の上へ並べて箱にのせればそれでお膳になる。帰りにはまた中へ入れて行く。その箱お膳が良平のところにはない。風呂敷を提げて行くにも、椀やら箸やらをのせたなりのお膳を包んで行くのは何だか危っかしい。良平は箱お膳のことをいってみたことがある。おばばが、箱お膳よりも輪島の方がいいんじゃという。それでも、実際不便であぶなっかしい。

家中をあけっ放して、宮平の家ではお寺さまがお経をよんで、それから御馳走になった。

「さ、良ちゃん、一つ行こう。」と隣りに坐ったおんさんがいう。おんさんは徳利をつまんでいる。

「さ、起こしないま……」

おんさんは盃をおこせという。盃は伏せてお膳にのっている。

「うら、酒、のんだことないんじゃ。」

ぐるりと並んだ中で、子供が良平一人なので心細い。子供は大勢いるが、みんな台所の方でさわいでいる。

「のんだことない……今日から飲めゃいいがい。さ……」

良平が困っていると、こっち隣りのおんさんが、「真似だけしないの。」という、「おじさんの名代じゃさかいの……」

親切でいってくれるのらしい。良平はしぶしぶ盃をおこした。

「何じゃい。『がめ』(亀)の子じゃがい……」

そういって初めのおんさんがつぐ。ちょっとなめて見る。辛くはない。ちょっとうまいようにも思うが、何だかわからない。「がめの子」というのが少し愉快でない。

「それゃア、『おじょっさま』(御住持様)らア、あかん、あかん。なあも知らんのじゃさかいのオ、あははは……」

上座のお寺さまのところで、列から出てあぐらをかいたものもいて、わざとのように坂手のおんさんがあばれ声を出している。

「縄手のおじょっさまらア、ここへ一と杓かけてくれっていうたっちゅうんじゃさかいのオ。」

「あはははは ア……」とみんなが笑う。何だか、みんなが知っていることがあるんだろう。その何かで、お寺さまをひやかしているんだろう。

「何じゃいの、その縄手のってのは……」

「あっはっはは……」

と一そう大笑いになる。

「ほうら、見ない。地獄極楽ア知ってても、縄手の話さえ知らんのじゃさかいして……」

よくわからぬところもあったが、良平のきいたのでは、坂手のおんさんの話はこんな話だった。縄手というのは大ふ遠方の村の名だった。

むかし縄手におじょっさまがいた。百姓がおじょっさまを「ほんこさま」(報恩講様)によんだ。酒も出し、御馳走も出したが、おじょっさまの蕪菜のひたしもんが、赤葉のかちかちで、食えたもんでない。隣りの百姓のをみると、青々として、やわこそうだ。うまそうだ。それでおじょっさまが、「お前のひたしもんア、えらい柔こそうなが、わしのア、何でかちかちの赤葉じゃい。」と訊いた。すると百姓が、「うららがのア、下肥をかけたんでやわこて甘いんじゃ。おじょっさまのア、敬うて下肥をかけなんだんじゃ。」というた。すると、おじょっさまが、「そんなら、ここへ一と杓……」というて手塩を出いたといの……

無作法なげたげた笑いがはじけたが、お寺さまの顔は良平から見えない。坂手のおんさんが先きに立って、みんなでおじょっさまを困らそうとしているらしくも見える。坂手は村での「膝出し」で、いつでも坂手から「さべり」(喋り)がおこる。また組打ちになるんだろか——お寺さまが相手だから、喧嘩にはならぬかな。——それでも、酒の酔いはいつでもそうだから、お寺さまは大人しくしていても、誰から喧嘩になるかそれはわからぬぞ。——しかし良平は、それも心配になったが、目がちらちらするようで気になってきた。

「これゃ、うらは、酒に酔うたんじゃろか……」

酒の燗はいつもするが、飲んだことはない。さっきから、隣りのおんさんが上へ上へつぐ。それを何べんもなめたから、朝顔の盃でまる一杯くらいは飲んだかも知れぬ。頭が、痛くはないが変で見当がつかぬ。台所にいたのが外へ出て行ったらしく、外で子供仲間の声がきこえる。飯は食いたくない。外へ行きたくなって良平はそっと立った。

みんなの後ろからまわって玄関へ行く。下駄が一ぱいに並んでいる。隅に良平のがある。そこへ片足おろそうとして、良平は気味わるくなってまた足をあげた。せまい土間一ぱいの下駄が、くっついたなりでぐるうっと廻っている。それはゆっくりまわる。良平の下駄もまわる。下駄全部が渦をまいてまわっている。

もう一度良平は足をおろした。まわることはまわったが、下駄ははけた。そのまま外へ出る。木戸がやはりまわる。木戸と道は、まわるかと思うと右が上ったり左が上っ

たりする。良平は、子供たちのところへ行きたくなくなって家へ帰ることにした。それはちゃんと帰れる。家の木戸をはいる。おばばもどこかへ行っていない。そのまま囲炉裡の火たき座へ横になる……

それで良平は、肥しの足らぬ蕪が赤葉になるのを知っている。そのとき歯がまたちくりとした。心配になる。毎日毎日痛むようになるかも知れぬ。そのたんび、痛みが段々にきつくなって、それから疼くようになる……

家がそこになった。きっとそうなると思っていた通り、いつもの通り、徳利が重くなる。良平は我慢して急ぐ。家まではいれば痛みが退くように思う。

「帰ったざア……」といってはいった時にはほんとに痛みは退いていた。

「ああ、帰ったか、帰ったか……」とおばばが出てくる。

「誰か、きてるんかいの。」とおばばに訊く。誰かきているらしい。奥で話し声がして聞える。

「よっちゃなぎ（四っ柳）のおんさんが来なったんじゃ。良平は知らんじゃろ。朝鮮から休みにきなったんじゃと……」

「はあ……」といって良平はのぞきに行く。朝鮮なら、お父っぁんやお母さんの行ってるところだ。「よっちゃなぎ」には「いっけ」（一家）がある。その一家の誰かが朝鮮に行っているのだろう。それが休みに来なったのだろう。

「四つの字はわかっても『ちゃなぎ』の字がわからぬ、あの『よっちゃなぎ』じゃな……」

「あ、帰ったか……」とおじさんがいうのと一しょに、

「良ちゃんか。大きくなりましたなア。」とお客がいう。お客は、ふにゃふにゃの袴をはいて、頭を分けている。二人は広蓋をおいて酒をのんでいる。大きくなったというが、良平は初めてだ。覚えがない。

「このおんさんはの、写真屋さんなんじゃ。」

「あはは、写真屋ですよ。あした一つ、写真をとってあげましょう……」

そんなら、このおんさんは泊るんだな。写真を「とる」というのは、うつすのをそういうんだな。写真は、一年生にはいったとき恩地先生と一しょにみんなで写したことがある。機械はどこにあるんじゃろう。……

「さ、あけないま。」といっておじさんが「すずめ」を持ちあげる。

「これがですよ……」といって、今度はおんさんがそれでおじさんにつぐ。「この『すずめ』が向うにないんですよ。」

「そんなもんがないんかいの。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.